

十六 続海市巡礼

第二幕

じつは連れの二人を日本に帰国させて、老夫は二人よりも少し早い便で南西に飛んだ。四時過ぎ、巡礼最後の都市ボルドーの空港に到着した。バス停で鉄道駅に向かうかと尋ねたが、フランスの運転手は英語を聞きとる気がない。ましてへたくそな英語は。三十分で運ぶとたい文句の書いてあるジェット・バスは、ラッシュ・アワーになぜか一般道に入り、一時間以上かけて駅に着いた。おかげで郊外から狭い道を通って、ボルドーの街並みを観察できた。オランダと違って、ここは白い石造りの家が多い。巡礼者は駅前のはずれのホテルに投宿。

第八日 ぶどう畑の広がる田園

朝食を済ませると、フロントの若い女性に、これから出かけるローカル線の Velines 駅

に、列車の着く時刻に迎えるタクシーを手配してほしいと依頼する。聖ジャン駅に行き、午後のためにトラムとバスの五回券を買うなどして列車を待つ。駅舎は一昔前のたたずまいながら、石造りのすっきりした建物だ。構内にいくつかの店があり待合の空間が広くとつてある。調べてみたら市の人口が二十数万、都市圏全体で約八十五万人。これだけの人口があつて混雑しないのか、見通しのよい駅前トラムとバスの発着場がある。昨日のバスもそのそばに着いたのだ。旅行者にとっても安心感を与える。

十時五分発の列車に乗る。二時間に一本走る二両編成で、TGVも停車する駅から東へ分岐して内陸部へ向かう。ぶどう酒で名をとどろかせる地方にふさわしく、耕作地のほとんどがぶどう畑。春ののんびりした田園風景がどこまでも広がる。わたしは巡礼者にふさわしくなく一等車に乗ってみた。一つの車輛の一部がしきられて充てられている。事前に時刻表を調べたとき、この地方の駅が閉鎖されたりしていることを知った。フランスでもモーターゼーションが進んで鉄道は衰退しているのだ。ところが、分岐駅から乗ってきた男性四人と女性一人は、いずれも大きなチェロの入ったケースを抱えていた。どこかの町で、大きな弦楽器を五個も使う演奏会か何かがあるのだらう。日本のいなかでは見かけない光景だ。ヨーロッパで音楽が生活に根づいていると教えられる。列車はプラットフォームだけがある駅に停まりながら進む。しかし、二両だけの編成でも、ちゃんと車掌が乗って

いる。帰りには二人の車掌がいて、のんびりとおしゃべりをしていた。巡礼の住むいなかでも、鉄道がさびれた状況は似ているけれども、列車は運転手一人で運行されていて車掌はいない。先進諸国で資本の収益が減って人件費の削減政策が進んでいるのだが、このようすとフランスの方が人を大切にして、社会と人々の暮らしにまだ弾力があると推察される。

十一時目的の駅に到着。駅舎のない空き地にタクシーが待っていた。運転手は女性で英語を話す。少年が同乗しているので歳を尋ねたら八歳という。わたしの孫も同じ歳だと答え、しばし話をした。少年は初めて日本人を見たわけではないという。日本人をときたま乗せているようだ。車はいなか道を進む。人家はところどころに数軒あるだけで、ぶどう畑の続く田園の中を行く。しばらくしてわずかに家々の集まった村に入ると、辻を曲がって舗装のない狭い道を二百メートルぐらい進む。古い二階建てのいなか家の前の、周囲に雑草の生えた空き地に停車した。

二人の若い女性が応対するほかには誰もいない。一方の女性が鍵を持って「塔」へ案内してくれる。「英語がうまくないの」と言うのへ、わたしも同様だと答える。『エセー』を読んで、尊敬する人が思索したここに來たかったのだと話すと、彼女は、この案内人

だけど『エッセー』は読んだことがあります、古語はむづかしいから、と言う。現代の日本人に『太平記』を読むのが易しくないと同じだ。高名な思索の書というのも敷居を高くしているだろう。日本ではヨーロッパの古典がみな翻訳されていて、読みやすいのだと教える。螺旋階段で上る塔のおおよそ円形の部屋はかなり広い。訪問者に見せるために、その人の像や絵、胸鎧が二つ、昔の天蓋付の小さなベッドなどが展示してある。肖像画でおなじみの襟飾りのある衣装も掛けてあった。ただし、彼の人は新教徒ではないけれども、縞模様の展示品はプロテスタントの衣装という。『エッセー』の版本に晩年まで手を入れたそうだが、加筆したページの 하나가展示しており、筆跡を観ることが出来る。また、天井の梁に書きつけたというラテン語の文も再現されている。千冊を超える書物があつた弓なりの書架は、模写図が示してあるだけ。その図に、梁の文字と机も描かれている。

置いてある小さな机は本物に近いのだろうか。現代のように資料などを広げて書き物するには大きくない。昔の人は基本的に、自分の頭の中に入れた知識で思索したのだと判る。まだフランス語を話せない幼児のときから家庭教師にラテン語を習った人には、梁に書いた言葉は身についたもので、身心を導いたことだろう。小さな炉を見たら堀田善衛の『ミシエル城館の人』を想い出して、「冬は寒かったでしょうね」と言うと、「ええ」と

いう返事。写真を撮るときフラッシュをたいてはだめだと言われたのに、カメラの操作法が分からないままに写すと何回かフラッシュが光った。けれども、案内嬢は大目に見てくれた。ボルドー市の人で、ここが開いている期間だけ村に住んで働いているのだという。カンコンス広場にあるこの城主だった人の銅像の位置を教えてもらった。彼女が塔の鍵を閉めて去ったあとも、しばらくそのあたりを逍遙した。

塔は、モンテーニュ城の石の外壁で囲んだ四角形の南の隅にある。城館は、北西の一边全部を占めて比較的大きな立派な建物である。現在も館の持ち主が使用しているので、中庭にも外壁の外にも縄が張っており、プライベート域には入れない。モンテーニュが館内にはなく不便な塔を書斎にしたのは、もちろん独りきりで思索しなかったのだ。塔の窓から桃か桜の花が咲いているのが見える。城の周囲はまばらに樹木の生えた草地で、しだいに林になっている。時代は、旧教徒と新教徒とが入り乱れて戦い、封建制から王権の伸長する過程にあった。その混乱に満ちた時代に落ち着いた人間のあり方を求めた偉大な人を偲びながら、穏やかな春の陽射しの中にいる。

事務所に戻ったのは十二時頃。何か食べるものはないか訊いたら、見てのとおりここにはワインしかないという。なるほど、塔の見物料を受けとるだけで、絵葉書ぐらいしか置

いてない。村にはサンドウィッチを売っている店がないかという問いには、三、四キロメートル離れたところにしかない、と。ここは二時まで閉めて、その間二人は自宅に帰るらしい。しかたがないからタクシーが来るまでその辺をぶらぶらしようと、その場を離れていくと呼び止められた。困っている遠国の老人を見かねて、塔へ案内した人とは別の人が、自宅に帰るついでに一番近い店へ送っていかうと言ってくれた。もう一人は、途中で村の一軒の家に入って行った。そこに下宿しているのだろう。それからしばらく、ぶどう畑の広がる田園を通り、林をぬけて、若い女性の運転する車でドライブ。普段の道とは違う道を回り道しているようで、「この道を歩くのはちよつと遠いわね」と言った。けっこうな距離を走り街道に出て、コンビニエンス・ストア風の店の前で降りしてくれた。

店の一角で、サンドウィッチやハンバーガーをつくるために、肉やハムをガラス・ケースで冷やしている。店の前で友達と話していた主人が入ってきて、ハンバーガーをつくってくれた。主人はまた友達との会話に戻る。女主人がコンビニエンス・ストアも合わせてレジを受けもっている。壁ぎわの二人掛けの二つの小さなテーブルの一つに座って食べた。水を出してくれたが、コーラも買って飲んだ。食べているあいだに近所の低学年の小学生らしい四、五人がやってきて、何か物色して女主人にお金を払って出て行った。こんな光景は、巡礼の住んでいるいなかでもめずらしい。フランスのいなかではまだコミュニティーが健在で、

人のつながりのあるゆったりとした暮らし方が残っていると見える。食べ終わって店を数歩出たら、話をしていた主人ともう一人が呼び止める。なにかと思ったら、巡礼はベルトに挟んだ紙のナプキンを付けたままだった。はにかんで手を挙げて礼を言う。

帰国して地図で調べたら、その街道をミシエル・モンテーニュ通りと呼ぶらしい。当初、一番近くの駅のそばにある小さな旅亭に一泊し、自転車で塔へ行くという計画を考えた。ところがその駅は廃止され、列車も二時間に一本しか走らず、翌日にゆとりがないのであきらめたのである。今その街道を西へ歩く。もう庭に藤の花が咲いている。日本よりも早い。三叉路まで来ると、「モンテーニュの塔」という交通標識が北への脇道を指している。すぐに通ってきた鉄道を横切る。道はゆるやかな坂になって丘の上の林へ続く。家がまばらになっていく。しだいに緑の若草が道の両側に広がり、路傍に黄色いタンポポや名を知らない白い花が咲いている。奥まったところどころに好ましい屋敷が見える。その人たちはどんな暮らし方をしているのだろうか。海辺に暮らす老人はこういう田園の暮らしも楽しいだろうと思う。坂は傾斜を増し、道はカーブを描いて続く。林を抜けると、またゆるやかな丘のうねりが見えてきた。耕した土地はぜんぶどう畑だ。背のとても低い幹に、五、六十センチメートルの枝が一本だけ出している。自分で二本のぶどうを育てている巡

礼は日本の仕立て方と異なることを知る。

四十分も歩いて丘の頂上に来たが、塔は見えない。標識の道から逸れてはいないと思うけれども、しだいに不安になった。つい向こうから来た車に手を振って停まってもらい、「モンテ・ニユ城はどこ」と訊いた。「家々の見えるあそこ」と教えてもらえたが、老いた東洋人がさまよっていると思われるかもしれない。見覚えのあるところに着いたので、あたりを散歩する。いなか家のたたずまいは旅人には好ましい。草地にチューリップなどが咲いている。ここにも藤の花。辻の一角は木を植えた草地でモニメントがある。三色旗の立つ下の掲示板に、近く開催される催し物の案内が掲示してある。物音のしないこのコミュニティも生きているのだ。四月になったばかりなのに陽射しが強いので、モニメントの向かいにある小さな教会の日陰に入った。モンテ・ニユの生きて死んだ年数を刻んだ墓石のような碑がある。その脇のベンチに腰かけて二時を待つ。

二時頃、先ほどの女性が下宿先から歩いてきたので、手を挙げて挨拶する。掲示板の向こうにあるごみ箱に持ってきたごみ袋を捨て、城への小道に渡したチェーンをはずして入って行った。わたしも事務所まで戻り、車で送ってくれた女性に礼を言う。二人はぶどう酒とそれを入れる箱を準備している。聞くと、十人ほどの客が来るのだそうだ。車で送っ

てくれた方が、あなたはいい季節に來た、七月になると客が多くなるが今が氣候の一番いい時だ、と言った。会話からいくつかのことが判った。ここはプライベートな施設なのだ。ナポレオン三世の大臣をした人がモンテーニュ家から買いつつて、今はその子孫の所有という。立派な館の方も観光客に見せれば、ここはよい観光地になるだろうが、誇らしい城館住まいの楽しみ優先し、古びたしかし高名な塔で客寄せをして、その名を冠したぶどう酒を売っているのだろう。わたしは酒をほとんど飲めないと言ったが、幾種類かのうち強くないボトルからグラスに注いで試飲させてくれた。『エセー』の中でモンテーニュはワインを水で割って飲んでいますねと話したら、昔のワインは強くよい品質でもなかったと教えを受けた。事務所のある二階建ての裏手には大きな建物があるから、ワイン製造場なのだろう。そちらの方へ矢印を向けた板が立ててある。そのうち三台の自動車に分乗して予約客が來た。

ワイン製造場側のクローバーかなにかの草を、小柄な男が草刈り機に乗って刈っている。よく見ると少年だ。眼が合うと頬笑んだ。仕事が終わったら、彼は自転車に乗ってぶどう畑の中の小道を去って行った。遊びに行ったのだろう。巡礼もまだ小学生の頃から家業の手伝いをしたものだが、日本の今の子はいなかでも労働を体験することがない。約束の二

時半を過ぎてもタクシーが来ない。じつは昼食をとるところがないと分かったとき、塔に案内した人が、運転手に迎えに来れるか問い合わせてくれた。それがどういう会話だったのか疑問が生じる。列車の時刻が迫っている。幹線の駅までタクシーで行けるか尋ねたら、遠くて料金が高いですよと答え、彼女が朝のタクシーに電話して、すぐに来るように頼んだ。やはり、前の電話を受けたとき、別のタクシーで帰ったと考えたようだ。

やきもきしているところにやっと来た。もう列車に間に合わない時刻だ。しかし、電話をかけてくれた人が携帯電話で調べたところでは、列車は遅れているらしい。礼を言っておわただしくタクシーに乗りこむ。今度も息子が一緒に後部座席に座っている。わたしは助手席に運転手と並んで座った。今日は土曜日とはいえ、少年が一日母親といっているのは、母子家庭なのだろうか。出生率が日本よりも高いフランスでは、家庭の持ち方についての意識が昔と変わり、父親と暮らしていない子供が多いと聞いている。母親は、老人を市の福祉施設に送り迎えるのに忙しかった、いつもそうだというような話をした。この国でも、老人になれば生活に不便がでるのだろう。今朝の駅ではなく西にある駅に先回りすれば間に合うだろうと言って、そちらに向う。間に合った。駅舎のないプラットホームに十人ぐらいの乗客が待っている。

第八日 月の港

海市巡礼と言いながら田園に行ったのをお咎めあるな。モンテーニュ殿は、前後してフランス王位に就いた二人のアンリ（じつは敵対関係にあった）に一目置かれて侍従の地位を授かったが、その身分は、ボルドー港の大商人だった曾祖父がモンテーニュの城と領地を買ったことに始まる。封建体制がゆるめばそういう身分の移動が可能になる。検校の地位を買った人物が息子に將軍家御家人の株を買い与え、その玄孫が勝安房守になったのと同様である。モンテーニュは、ボルドー高等法院を三十七歳頃退いて城館で思索したが、動乱の時代にあつて、ボルドー市は中庸の人に市長に就任するよう要請した。その偉大な精神はこの月の港で育まれたのだから、もとより巡礼の目的地である。

四時にボルドー駅に戻るとすぐトラムに乗って市の中心部へ。カンコンス広場の教えられた場所でもンテーニュ師に会见。白い大きな立像は、尊敬の念がそうしたのでろう、威厳がありすぎるほどだ。巡礼が書齋の壁に貼っている写真は、ソルボンヌ大学にあるという銅像のもので、木蔭の下椅子に脚を組んで座り、とてもおだやかに微笑している。気に入ってA4フォト用紙に印刷し、師と仰いでいるのである。旅行前にはこの広場で撮る写真と入れ替えるつもりだったが、それはやめることにした。帰国した今、以前のまま

の写真の下の柵に、モンテーニュ城で買った塔の絵葉書を立てている。

幅広いカンコンス広場の北側に、南のモンテーニュ像と向かいあつて百五十年後のもう一人の偉人が立っている。モンテスキューである。十八世紀のこの人も、ボルドー高等法院の法官になったが、先輩に倣つて三十七歳で退官して学究の生活に入り、やはりボルドー市長になっている。あの浩瀚な『法の精神』は、著者が人間と社会を深く知つていたことを物語る。ボルドー市は、世界中の人々が尊敬する二人の市長をもつたことを誇ることができる。うらやましいかぎりだ。懐深い二人の思想家を偲びながら広場の長辺を東に向えば、二つのとても高い石柱が立っていて、ローマ風の像がそれぞれの上にある。

その東にガロンヌ川の岸边がある。月の港という美称を与える湾曲した流れに沿つて、南北に遊歩道が長く続く。岸のこちらの旧市街は、三、四階建の高くない建物がゆつたりと広がつて、上品な感じのする都市だ。北側の下流にも町がかすむほどつらなっている。かつて栄えた港だったここはビスケー湾からずいぶん奥まつているが、少し南に見える大きな橋よりも下流側には橋をかけず、外洋船がここまで入つていたのである。川岸の広い遊歩道で、たくさんの人々が、夏時間になった上天気の良い日を楽しんでいる。歩いている人、ローラースケートや一輪車や自転車に乗つた人が行き交う。もう父親になつた男が、

自分はローラースケートを履き、乳児の乗った乳母車を押して遊んでいる。わたしもかなりの時間腰かけて景色を眺めていた。

川岸からカンコンス広場の中心線を歩んで、西の端にある壮大なモニュメントのところまで進んだ。天使のいる高い石柱が立ち、台座はいくつもの彫刻で飾られ、南側に馬車に乗った女神像がある。もう五時をだいぶ過ぎている。そこから南の古代様式の列柱のある大劇場を観察しながら、コメディイ広場に出る。シャーベットを食べながら歩行者天国になっているカトリーヌ通りを見ると、少し傾斜して続くはるか向こうまで文字通り人の波で埋め尽くされている。今年の復活祭はまだだが、お祭り気分の最初の土曜日、セールもあるのだろう、万を超える人々が繰りだしている。巡礼はその人波をかき分けて進む。

第九日

朝食のとき、昨日タクシーを手配してくれた人が「モンテニス城はどうでしたか」と訊くので、「城はもちろん田園の春も満喫した」と答えて礼を言う。ひとまずチェックアウトの手続きをすると、宿泊者にこれを記念に渡していると、二泊分、塩を入れた二本の筒をくれた。航空券を探したとき、オランダ航空、エア・フランス、大韓航空が提携してい

ることを知って、ボルドー空港を午後遅く飛び立つ便にした。今日の午前中に時間がある。駅前からバスに乗ってもう一度街に出た。うっかりして道をまちがえたりしながら歩き回り、裁判所へ向かう。石を積んだ古い壁があった。一部は円筒形をしている。昔の城塞の跡だろう。あるいは牢獄だったか。高等法院の法官だった二人の偉人の時代に、法院はどこにあったのだろうか。古い壁につながる現代の裁判所は、奇抜なデザインの建物で一つの見ものである。「Palais de Justice」という文字と公正を象徴する天秤の飾りがなかったら、巡礼は裁判所と気づかなかっただろう。

北側にあるボルドー美術館に行ったら、開館は十一時からと書いてある。仕方がないから、市役所横を通ってサンタンドレ大聖堂へ行った。この場所は、「Hotel de Ville」というトラムの停車駅のあるところで、一方に格式ある石造りの建物がある。物を知らない巡礼は、門の柵が閉まっているその建物を見て、どんなホテルかなと考えた。案内書によれば、この hotel が市庁舎なのだそうだ。大きな広場には中古品を売る店が出ていた。見物しているうちに、記念にしようと思って、小さな額に入った風景画を買った。代金三ユーロ。たぶんプリントしたものだ。どこの景色か尋ねると、イタリアだという。ボルドーでイタリアの絵を買うのもおかしいけれど、ときどき壁に掛ければこの旅を想い出すだろう。

時間があるので、広場にまでテーブルを出しているカフェで大聖堂を眺めながら待った。一番近くの露店で一人の女性がテーブルクロスを広げて物色した。店の女主人は売りこもうと図ったが、逃してしまふ。それは青い魚の単純な図柄を散りばめたもので、遠くから見てもしろいと思った。時間も適当なのでカフェを出て、そのテーブルクロスを間近で見直して買った。値段は五ユーロ。

ふたたびボルドー美術館へ。巡礼の知っている作品はないが、なかなか侮れない絵画があると思う。ティツィアーノ、ブリュゲルなどという名のつづりが読めた。ボルドー市の粋な計らいで、この入館料は無料。各室に係員がいる。中には、東洋人やアフリカ系の人もいる。どういう人たちで、管理経費はどうなっているのだろうか。帰国してから旅の番組を見ていて、石造りの家々の外壁のよごれを長い年月をかけて落としていることを知った。巡礼の歩いた気品のある町は、それを維持しようとする市民の意志が支えているのである。

終幕

こうして十六・十七世紀の海市を訪ねる巡礼は終わった。俗人に過ぎない愚禿は、六人の偉大な師に会って問答もせず、得るところがあっただろうか。雲水が行脚の足を休める雨期に入って、最後のヨーロッパ旅行を想い出しながらぼんやりと考える。月の港でもらった塩は、大西洋の海水を乾燥させてつくったのだろう。とほうもない数の原子からなるこの世界のことから、あの塩の中には、六人の先師の身体を巡り、偉大な精神の活動に参加した分子が含まれるに違いない。それを食べたら、わたしの精神もいくらか活発にくだらうと期待しながら、また極東の島国で、水平線の見えない内海を眺めている。